

Dhādekī-Sālhāpūr の「職業 caste」

—北インド農村の社会と生活 (VII)—

佐々木 明

本稿では Dhādekī-Sālhāpūr に住む中間的または職業的な jāti⁽¹⁾ の主要な経済活動と家族構成を記述する。8の中間 jāti を「jāti の職業につく」ことを基準に3群に分類した。本稿では、「jāti の職業につく」は「定期的に一定量の穀物 (anāj) をうけとる特定の雇用 (これも anāj⁽²⁾ とよぶ) に従うこと」を意味する。3群はそれぞれ、(I) その jāti の全世帯がその jāti の職業につく「anāj jāti 群」、(II) その jāti のなかに jāti の職業につく世帯のある「部分的 anāj jāti 群」、(III) jāti の職業に全くつかない「非 anāj jāti 群」である。本稿で重点をおく伝統的副業、家族構成の考察をふくめ、中間・職業 jāti の記述は、支配 caste の記述はもちろん、次稿で扱う予定の Brahmin・被差別 caste の記述に比べても事例が少ない。本稿の内容が通説と異なるとすれば、Dhādekī-Sālhāpūr の当該身分群の様態が北インド農村の中間 jāti として常軌を逸脱しているか、または通説が北インド農村の中間 jāti の実態とは無関係に構築されている結果だろう。

(I)

Khāṭṭi

Khāṭṭi は現在も、おそらく過去も、jāti の職業関係の収入が最も多い jāti である。

Khāṭṭi の anāj 取得の根拠は、農業経営者の農具、とくに経営の象徴である犁 (hal) の修理と考えられている。この他に農業労働者を含めた農作業する住民が用いる各種の農具を修理して個別に支払いを受ける。ただし、特に重要な rabi 収穫時の鎌とぎ (佐々木, 1986: p43) は anāj の一部だった⁽³⁾。農業労働需要が最高潮に達する rabi 収穫期 (佐々木, 1985: p15) には Khāṭṭi の鎌とぎ作業も最高潮に達したから、農業労働に従事できなかった。Rabi 収穫期以外にも、農業労働に従事する経済的必要はなかった。家 (ghar) に隣接した仕事場 (dukān) にフイゴ (dhokkhi) をおき、各種用具の鉄製部分を修理する Khāṭṭi のフイゴは小さくて簡単な修理しかできないので、急いで大型修理をする時には隣村の Lohār⁽⁴⁾ の所にもっていく。Khāṭṭi にはできなくても、急がない大型修理は Bāgli のくるのをまつ (佐々木, 1983: p81)。

Jāt の6つの segmental lineage (khandān の patti) に対応する6世帯の営業する Khāṭṭi は系譜的 anāj 関係を有する Dhādekī 唯一の jāti である。ただし、Jāt のみにサービスするのではなく、Brahmin・Chamār・Ghossī の耕作世帯 (各1世帯計3世帯) が顧客に加わる。耕作世帯は1 fassil (半年) 毎に anāj (rabi には小麦20kg, kharif には米20kg) を特定の関係にある Khāṭṭi に与える。例えば Khāṭṭi の Banarasi (「利口者」の意) は犁 (hal) など役畜力を利用する農具の修理を根拠として、7人の農業経営者から総計280kgの

anāj をうけとる。同人の8人家族の年間穀物消費量は1,200kg前後だから、anāj は最低限の生活に必要な現物収入の極く一部をしめるにすぎない⁽⁶⁾が、家族規模が小さかった（たとえば4～5人）前近代期にはanāj、小農具修理に多少の副収入を加えれば生活は容易だったとみられる。今世紀はじめまでは、樹木(sāl, sishām)の伐採⁽⁶⁾が副収入として重要だったらしい。Jātの所有する樹木を切ったみかえりにKhattīは燃料用原材をえ⁽⁷⁾、建築用・木工用材となる主要部分はJātが入手し売却したとみられる。

Khattīには相互の関係をたどりえない3家系がある。家系A(3 anāj単位)は住民登録上は3 parivārだが、聴取では共通のgharに住む⁽⁸⁾。家系B(1 anāj単位)は男性のみからなり、2 parivār・1 gharからなる⁽⁹⁾。家系C(2 anāj単位)はparivār・gharとも2つである。4つのgharの構成は、解体した基礎家族に同居者の加わったもの1、基礎家族型1、同居者の加わった一世代二夫婦型1、同居者の加わった二世帯二夫婦型1、である。Khattīの住居群はもともとabadīの南端にあったが、先行して世帯数の増加したJātがabadīの周囲に家をつくったので、Khattīのgharは敷地を広げられず、狭い旧abadīの中に封入られて家族構成が複雑化する一方、dukānをgharから離れた地点に設けざるをえなかった。Jātiの職業が農業経営に不可欠で、安定的需要の多い⁽¹⁰⁾Khattīは、職業jātiの特殊例であるといっても過言ではない。

Kumhār

Kumhārのjāti職業は土器作りとされる。特定の池の土器原料土(pitti)を鍬で掘り上げ、紐をあんだモッコ(behn)に入れてかついで⁽¹¹⁾作業場(dukān)に搬入する。原料土を鍬で適当な大きさに切り、dukānの前の小屋の中において乾燥度を調整してから、砂をまぜて足でふみつけ、良質の砂をまぜて石板の上でさらによくねる。Dukānの床にうめた軸(地上10cm)を中心にまわす⁽¹²⁾直径120cm、厚さ15cmの木製手廻しロクロ(chakk)の上で成形する。成形土器をある程度乾かしてから、土器片(pinda)を内側からあてがい⁽¹³⁾、外側から木のこて(tappā)でおして胴を修正する。底に皿をあて、口にhukkāをたたきようにおしつけて内部気圧を急にあげて整形し、もう一度乾燥させたあと、同じ作業を繰り返す。半乾燥状態の土器に女性が模様(口縁部中心の同心円状の白色・赤色の幾可文様)を書くこともある。

充分乾燥させた土器がたまるとāwā(またはawā:直径約6mの凹地)に運び、土器と土器の間にuplāをはさみながら、中央部に円筒状の垂直孔を残した円錐台形につみあげ、最後に円錐台の周囲にuplāをたてかけて表面を牛糞でぬりこめ、中央部の垂直孔に火をおとす⁽¹⁴⁾。焼成中は一人が棒をもって燃え具合を調整する。焼き終るとくずしてdukānに運ぶ。主として収穫期直後に年計6回以上、需要に応じて3つのdukānの土器を一緒に焼く。製品を直ぐに引き渡し、anājも同時に支払う。土器は、購入量に差はあるが支配caste・農業労働者を問わない必需品なので、Kumhārの取り引きは、ほぼ全村に分布する。さらに隣村にはKumhārがないので、DhādekīのKumhārが土器を供給する。つまりDhādekīのKumhārの供給先は多く、同じ村のJātに依存する程度は弱い。

Kumhārのanājは1fassil・1世帯あたり2ḍarī(小さな籠二折)で、Dhādekī全体がKumhārに支払う穀物は1,700kgと推算される。Kumhārの現在の人口では年間穀物消費量は4,000kg以上に達する⁽¹⁵⁾が、家族規模が小さければ必要主食糧の少なくとも半分をanāj

で補給できたとみられる。各 fassil の anāj はその期に土器を買った者がその土器を売った Kumhār に渡すが、支払い者と Kumhār との関係は fassil ごとに変わる。具体的には買い手が dukān にやってきて声をかけ、三軒のうちで返答のあった一軒の ghar からその fassil の間は購入する。この方法では、三世帯間で一時的な収入不均衡が生じやすいが、作業は協同なので、村外からの収入も合わせて、三世帯が調整する。

各世帯は一頭づつ馬を飼っている⁹⁴。小都市の市場・Kumhār のいない隣村に製品を運ぶ⁹⁵ のにも用いるが、一般の運搬に貸し出す、または Kumhār 自身が運輸業に従事することもある⁹⁶。他村の報告例では馬・ロバを貸し出して、副収入をえた⁹⁷。伝統的には⁹⁸、rabi 収穫期の穀物運搬が土器製作とセットになった⁹⁹ 準 jāti 職業であり、近代的運搬手段のなかった時期には Kumhār の役畜が重要だったろう。牛荷車は効率が悪く（佐々木、1984：p24）、犁をひかせる時には運搬に使用できなかったから、他役畜の利用価値は大きかった。とくに rabi 収穫期後には短期間に大量の収穫物を都市に搬入する必要があったから、土器生産による収入不足をこの収入で補えたらう。土器製作過程の後半に女性の作業（絵かき・燃料あつめ・顧客への製品分配など）が多いことも、土器製作が男性から女性にリレーされ、冬期後半から男性が運搬業に主力を投ずる分業慣行があったことを示唆するのかもしれない。Kumhār が rabi 収穫労働に参加しないのは、現に十分な収入があって農業労働の必要がないこと他に、この時期に刈り取り労働に投入すべき遊休労働力が伝統的に不足しがちだったことにも起因するのだろう。

Kumhār は相互に関係をたどりえない3家系からなり、3家系が各一 parivār・ghar をなし¹⁰⁰、jāti の職業収入を3世帯が均等分割する。Kumhār の住居群も旧 abadī の南端に位置する。Anāj の契約・支払い方法から、共通した dukān（作業場）・各世帯の個別 dukān（支払いをうける場所）・ghar（各世帯）の三部分からなる集住的居住をとる。Kumhār にも親族組織とよぶべきものはない。

Dhōbī

Dhōbī¹⁰¹ が洗うのは dotai・chadaī（佐々木、1984：p15）・dārī（小型綿敷布）・khēs（厚綿敷布）・pagrī（ターバン）などの大型布が中心で、「洗濯 caste」とよぶのはややあまいな表現である¹⁰²。農繁期でも上記以外の品は Dhōbī に出さない¹⁰³ので、Dhōbī が多忙になることはない¹⁰⁴。Ghar の一隅に洗濯用の baṭṭī（かまど）をつくり、中庭から燃料を入れて煮出して洗うこともあるが、主として abadī 外に出て、水で洗濯する。所有者別にふるしきにつつんだ洗濯物を馬にのせ、水辺（Dhādekī では運河）に行き一家総出で作業する。水につけた布を板（istri：st. H. 「アイロン」）にのせ reh（洗濯用粘土）をふくませ棒でたたき、水につけて板にたたきつけてから、人間ごと水に入ってゆすぐ。ゆすいだまま水のなかにいる夫が一端をもち、岸にいる妻が他端をもってしぼる。夫がたたき洗いに戻ると、妻はしぼった布を干し場（低木の枝を利用する）にもっていき、子供と一緒に布をひろげる。作業は朝6時から午後4時頃までつづく。

Dhōbī も洗濯物をはこぶ馬を飼っている。この馬で kacchā Inṭ 原料の gara を運ぶのが Dhōbī の重要な副収入源だった¹⁰⁵。

Dhādekī の Dhōbī は相互の関係をたどれない2家系2世帯（parivar・ghar）よりなる。以前いた Dhōbī は伝染病流行時に全滅し、現2世帯はその後の移住による。一方の世帯

(一世代二夫婦家族)は全 Brahmin と2世帯を除く全 Jāt の洗濯をうけおう。Anāj は1 fassil に6 dari, 総計1,500~2,000kgで、これのみで生活できる。もう一つの世帯(基礎家族)は Dhādekī の Jāt 2世帯と他村の2世帯計4世帯から anāj をうけとるのみで、実質的には農業労働者である。Dhōbi にも親族組織は存在しない。

(II)

Julhai

Julhai の jāti 職業は織布とされるが、Dhādekī では大部分が農業労働者である。

Jāti 職業による収入のある二世帯は、ほぐした古綿からつむいだ糸で厚布をつくるように依頼する世帯から、3ヶ月以内の製品化を条件に、約1.3kgの anāj をうけとる。単位量は小さいが、Dhādekī 以外の村の人々との間にも anāj 関係があるので、穀物量・労働量とも総計は大きく、成人男性の労働時間の約半分は anāj 関係の注文織布にあてられる。成人男性は労働時間の残り半分を町の小工場で働き、主要な収入をえる。粗綿を渡されれば Julhai の女性が紡ぎ、糸を渡されれば洗ってから、機(kargā)で男性がおる。1枚の dotai をおるのに8人日を要し、準備作業に一家の労働力を総動員し、成人男性は村にいる半月間を使って、一ヶ月に大型布6枚をつくるが、女性労働力は余り気味である。ただし、rabi 収穫労働に参加して現物賃金をえるから収入が絶対的に不足することはない。

機織りとセットになった準 jāti 職業は綿花・綿糸の集荷・運搬、町の工場での機織などだったとみられる。前近代的生産としては例外的な市場規模にまで発展した近世インドの木綿生産も、無数の小経営の集積であり、Julhai はその各段階に参加する jāti だったのだろう。Julhai が住民の大部分をしめる村では木綿作を経営の一部に含む「農民」、一般的には棉花生産者であるよりは、村落で生産される棉花・綿糸の都市搬入者、都市手工業の機織労働者であり、村内の他の caste の生産する棉花の零細紡績、村内の他の caste が手作りする綿糸の集荷などの木綿生産の多様な局面に参加するのが、Julhai の本来の jāti 職業で、「機織り」はその象徴的表現だったとみるべきだろう。村内他 caste の古綿再生糸の集荷・織布を主とする現在の活動への縮小は、近代木綿工業による在来木綿手工業の崩壊の結果だろう。

Julhai には4家系がある。家系Aは5 parivār・7 ghar, 家系Bは3 parivār・6 ghar, 家系C・Dは各1 parivār・ghar からなり、旧 abadi 内に ghar のない(つまり居住歴の短い)C・Dの二世帯のみが jāti の職業につく。

Julhai の住居群は三つある。第一の住居群は他の2住居群が基礎家族のみからなるのに対し、基礎家族は1で他は複雑な構成をとる。居住単位が複雑なのは joint family 志向によるのではなく、敷地の周囲を Jāt に囲まれて狭い空間にとじこめられているからである。旧 abadi 内には ghar が密集し、ghar 間を仕切る建造物がないから、同一家糸の複数の ghar が出入り口が一つしかない袋小路に封入されていれば「joint family」的外観を呈する。第一の住居群では、2つの(少なくとも現在では親・姻族関係の不明な)家系群に属する複数の基礎家族単位が狭い空間におしこめられて「非血縁的な joint family」の恰好になっているにすぎない。残りの二つの住居群は旧 abadi の外側にある。第二の住居群は jāti の職業をしている家系C・Dの二家族よりなる。

旧 abadī の東端をなす溜池をこえた地点にある中間 jāti の住居密集地区の一隅にある第三の住居群には7つの基礎家族が住む。住居が密集する上に二家族が家畜を飼っているので生活環境は著しく非衛生的である。二家族を除くと、一室間取りの ghar が共通の中庭を囲み、各 ghar の入り口に chappar をたてかけ、中には chārpai をおいて子供達と老人が日中を過す。この5世帯は、住民登録のあった1960年頃には村内に住まず、1965年以降労働者として Dhādekī に戻ってきた人々である⁸³。彼等は、都市の失業率の変動にあわせて、村と町の間を移動する周辺的な人口で、筆者の調査時にたまたま在村していたにすぎない。

A・B家系の家族数(6~7)に比べてC・D家系の家族数(1)が著しく少ないこと、およびA・Bの ghar が旧 abadī 内にもあるのに対してC・Dの ghar が旧 abadī 外にしかないことの二つから、C・DはA・Bに比べて居住歴が短かいとみられる。特に注目すべきなのは、jāti 職業に従事するのがC・Dの二世帯に限られる点である。在村世代数がふえるほど jāti 職業従事率が低下して、農業労働者化する傾向は、jāti の職業が超世代的に維持されたとみる 'jajmāni' の考え方と矛盾する。Jajmāni の jāti 職業継承の存在を認めて農業労働者化を近代的現象とみるか、前近代にも農業労働者化がおりやすく、jāti 職業の継承がとぎれ、かつ jāti 職業の需要があれば、村外から新しいその jāti の世帯が移住したとみるか、については手がかりが余りに少ない⁸⁴。ただし、rabi 収穫期には、ほとんど全部の jāti が農業労働に参加し、Julhai も例外ではなかったから、jāti の職業と農業労働が絶えず複合した状態だったことは確実である。

Nāi

Nāi の jāti 職業は「床屋」とされ、Dhādekī の Nāi もかつては約40人の Jāt の整髪等⁸⁵により、総計200kgの anāj を半年毎にうけとった⁸⁶。現物収入は標準的規模の一世帯の年間消費量より少ないが、rabi 収穫期の労賃および雑多な収入があったから、Nāi が一家族だけだった今世紀半ばまでは経済的困難はなかったとみられる。一般的には顧客数が一定数より少ないと床屋業は成立しない。前述の約40名が Nāi 一世帯の専業条件とすれば、Jāt の世帯数がこの水準に達するのは1800年以降だから、この時期前後までは Nāi は「床屋的」でなかったと考えざるをえない。北インド農村によくみられる jāti のなかで、Nāi の jāti 職業(床屋)の収入寄与率は Chamār を除けば最も低く⁸⁷、生計の大部分を床屋以外の収入によらざるをえなかった。農村内では他に生活手段がないから、実質的には kharif の零細耕作者、rabi の(収穫期)労働者だったと考えざるをえない⁸⁸。一般に Nāi の伝統的副収入は、仲人役(婚約・結婚の相談相手、伝達役:佐々木, 1981a: p. 298)・社会的補助(宴会の調理・接待、外出のお伴)に対する支払いだったとされる。たしかに、Nāi・Nāin は支配 caste の ghēr·ghar に比較的自由に出入りし、村内外の仲介(Alavi, 1972: p. 14)をしたが、この収入は不定期だったから安定した収入をもたらしたとは考えられない。

Dhādekī の Nāi は単一家系からなり、今世紀半ばまでは単一家族だった。現在では、4 parivār⁸⁹ が登録されているが、ghēr·ghar とも単一である⁹⁰。封入型の大家族があるだけで、特に親族組織はない。

Nāi が類似する経済基盤をもつ他の職業 jāti と異なるのはその儀礼性(Sharma, K. N., 1961: p. 152)である。Nāi は北インド農村の支配 caste の通過儀礼のほとんど全部に積極的役割を果たした⁹¹ばかりでなく、Shāman 的機能の報告例すらある⁹²。通過儀礼の役割は

現在では Brahmin に置換されていて、近代化の過程で Nāi・Brahmin が儀礼的機能上競合関係にあったことが知られる⁶²。Nāi の儀礼的機能が明らかに先行し、Brahmin が積極的機能をもつようになるのは、近代を大きく廻らない時期からではないかと考えられる⁶³。

(III)

Jinwar

Jinwar は Kahār とよばれる⁶⁴。男性の jāti 職業とされるカゴづくりには余業的色彩が強い。湿気が高く、自由に採集した原料 (kānachi cf. 佐々木, 1986: pp. 43・44) の折れにくい降雨期に、小型の tokrī (半径60cm, 1時間人)・大型の tokrā (半径1m弱, 2.5時間人)をつくる⁶⁵。需要または Jinwar の現金の必要性に応じて作るので作業量は一定せず、多くつくった時には町にも出荷する。あむ時間だけなら農業労働より有利だが、採集・準備に時間を要するので、他の就業の機会の少ない人がすることが多い。8月に水のきれいないくつかの池にひし (singhara) の種をまき、10～2月に収穫して町や村にうる。高値で取り引きされる上に年4回とれるので男性の有力な副収入源である。

1930年代までは水運び・食器の掃除⁶⁶・輿担ぎ⁶⁷が重要な jāti 職業だったが現在では消滅した。水運び・女性が従事した⁶⁸食器掃除が anāj (一世帯あたり半年に10～15kg) の主要支払い対象で、anāj 収入だけで一世帯が充分生活できた。しかしこの作業は、他の jāti が兼務することのある雑業で、Jinwar の Jinwar たる所以は余業的カゴづくりにあった。なお、他の職業 jāti と同様に rabi 収穫に参加して、大量の現物収入をえる。

Dhādeki の Jinwar は3家系13 ghar からなる⁶⁹。他の中間 jāti と同じく、主要居住区は 'abadi の南にあり⁷⁰、道をはさんで旧 abadi 外にもひろがる。過密傾向にある他の職業 jāti の abadi 内住居群と同じく、Jinwar の abadi 内家族の構成は大きい⁷¹。旧 abadi 外では世帯構成は小さい⁷²。家系A・Bは小さな親族集団の外観を呈するが世帯数増加は1930年代以降の現象で⁷³、特に集団的な慣行はない。

Gōsāin

Gōsāin は同居者の加わった基礎家族1のみよりなる。古い shibji mandir (佐々木, 1981: p. 304) の建設時(1930年代)に寺の掃除を条件に若干の耕作権を与えられて入村したが、もともと利用機会のない mandir を掃除するほどの愚直さはないから、mandir は荒れるままだになっている。宅地をふくめ一切の不動産を所有しない農業労働者だが、mandir の周りを囲い込んで私有化している⁷⁴。

Mussalmān

Dhādeki の住民は Mussalmān (イスラム・ムスリム) を1つの jāti とする。この jāti は4 chalan (?<chāl' stH. 「やり方・習慣」) にわかれる⁷⁵。Tēli, Halōwai, Ghossī, Dūm がいるが、ghēr をもつ Ghossī 一世帯(自作農)を除くと、すべてが農業労働者である。農業労働者に多い亜基礎家族・基礎家族的傾向(9/17)と職業 jāti 型の封入型拡大家族(8/17)に分離する傾向がある。

Chalan Tēli⁷⁶ は2家系からなり、うち一世帯は近年まで anāj 関係のない chalan の職

業（油搾り）をしていた⁵⁴が、現在ではすべて農業労働者である。7 ghar からなり⁵⁵， abādī 内北西部のやや古い住居群（5 ghar）と独立後 abādī 外北東にできた新しい住居群とがある。両家系とも複数世帯からなるが、いずれも独立前後からの世帯増で、親族集団として特筆すべき現象はない。

Chalan Halowāī（5世帯）も Tēli 同様の労働者である⁵⁶。住民登録のない近年の移住による一世帯のみが chalan の職業を副業とする。自分の飼う水牛乳⁵⁷を小都市で加工するが、利益の大部分⁵⁸は町の dukandār（店主）にとられ手許に残るのはわずかである。

Chalan Ghossī は2家系からなり、飼っている水牛の乳、または Jāt から買った水牛の乳を町の牛乳屋に売り、村内では主に農業労働に従う単独生活者・基礎家族・二世帯二夫婦家族がつくる典型的な封入大家族一世帯と、地主自作農の一世帯復夫婦型一世帯がある。

Chalan Dūm は二家系3世帯⁵⁹よりなる。Chalan の職業は「踊り手」だが、実際には農業労働者である。一世帯は abādī の西端の池の外側で鶏をかって卵等を町にうって主収入としている。

この他に Dhādeki に住んではいないが、通いの chalan に Darzī がいる（佐々木、1983: p. 79）。Mocchī（靴づくり・靴なおし）も Dhādeki に住まないが行商でやってくる（*ibid*: p. 80）。

Jōgī（乞食）⁶⁰も Dhādeki で「行商」する（*ibid*: p. 81）。Mistrī（石工）⁶¹も Dhādeki で仕事をする（*ibid*: p. 50 n. 34）。

ま と め

このシリーズの1～6までで、Dhādeki の全生活のなかでの職業 jāti の活動の役割が大きくないことを理解できた。本稿ではさらに、

(i) 定期定量現物払い（anāj）のある jāti でも、一般に anāj だけでは生活が不能で、農業労働と副業をくみ合わせる必要がある。

(ii) Anāj のない職業 jāti は農業労働者である。

(iii) Anāj の有無にかかわらず、rabi 収穫期の労働による収入の絶対量は多かった（佐々木 1985: p. 15）。

(iv) 近代化により jāti 職業の収入が途絶した jāti もあるが、逆に近代になってから jāti に関係するとされる収入が増大した jāti もあり、また近代の一時期に jāti 職業の収入が一時的に増えた jāti もあるなど、近代化が jāti 職業の意味を全面的に喪失させるとは断言しがたい。

の四点を指摘できる。

これらの知見を総合すると、職業 jāti にはもともと jāti 職業による収入を他収入と組み合わせる必要があり、職業 jāti および次稿で述べる被差別 caste をとわず他収入として最も重要なのは rabi 収穫期の収入だったから、この論理を転倒させて、職業 jāti が jāti 職業につくことになっている rabi 収穫期動員労働プールを形成していた、と考えると北インド農村の構造をよく理解できる。

また本稿の記述から、住居敷地の限定されている状況（または jāti 職業の経営上分割の

抑制される状況)で複夫婦家族が生じやすく、敷地に余裕があれば基礎家族構成へと傾く——つまり joint family を選好する傾向のないことを指摘できるだろう。さらに、多くの jāti が一家系あたり 1・2 世帯にとどまり、それ以上の世帯数をもつ家系の膨張は近年の急増によるものにすぎず、親族組織とよぶべきものがみられないばかりでなく、前近代の少数世帯 jāti が何等かの原因によって村内から消滅し、外部から補充されることもあった——つまり職業 jāti の各種サービスが超世代的に継承される人口史的条件がなかったことも指摘できる。

註

- (1) 職業 jāti を “kāmkarñewālē” とする文献もあるが、この語は単に「仕事をする連中」を意味する一般用語なので採用しない。Jāti は subcaste (または caste) と英訳されるが、本稿では訳語の与える不適当な印象を混入させないことを目的として、原語のまま表記する。なお多くの文献ではこの語を jāti (st. H. ‘caste’, ‘subcaste’) と表記するが、筆者の調査した一帯では [jā:ti:] と発音し、[ja:ti] とは言わないので、そのまま jāti と表記した。
- (2) 南アジアの社会人類学的研究では ‘jajmāni’ とよぶが、調査地では ‘jajmāni’ を全く知らなかったため、実際に使用していた anāj を採用した。
- (3) 大面積の rabi 畑を短期間に収穫する必要 (佐々木, 1985 : p. 15) から、鎌の刃がこぼれ収穫作業の途中でとぐ必要が生じるので、Khatti が anāj 関係にある多数の経営者の畑の間を動いて修理する方式をとるから、多忙で個別の支払いをうける時間はない。
- (4) Lohār は設備の本格的な鍛冶屋の jāti であるが、anāj の義務は Dhādeki の Khatti とほぼ同様である。Khatti と同様に jāti 職業への就業率が高く従事する日数も多い (Reddy, 1955 : p. 133)。Punjab では電動小工場を農村内で経営する例もあり、近代化に積極的に対応し、仕事量は増加傾向にある。
- (5) 現在では家具等の木工で収入の大部分をえる。木工だけで anāj・農具修理を全くしないものもいる。小都市で材木をかい、扉 (10人日)・簡単な机 (3人日)・窓枠 (2人日) をつくり、村民に売り、余裕があれば小都市の市場に出す。手斧 (basorā)・小鋸 (ārī)・ドリル (barwā) などの簡単な道具を用いる。家具・窓枠の需要は、家屋の焼成レンガ化によって生じた近代的現象である。
- (6) 現在でも錆ついた大鋸 (ārā) が Khatti の ghar に残るが、大鋸 (二人びき、1分あたり直径 1cm をひく) は近代的工場の生産品なので、英領化される前には斧を用いたのだろう。現在では伐採の職人 (Maslim の Bāri) を町からよんで切らせるが、耕地が拡大した 19C には ārā を用いた林地伐採が Khatti の経済活動として一時的に重要になったのだろう。
- (7) 一部は製炭して (Baden-Powell, 1972 : p. 16, n. 1)、他は薪木として都市市場に売却して主要な副収入にしていたと考え、近世都市の燃料需給を考えやすい。
- (8) 以下 parivār を住民登録上の世帯、ghar を家族の意味で用いる。家系 A の三人の兄弟は別々の三つの dukān で木工・農具を修理するが、未婚の長男と次男夫婦 (貧困型の polyandry を想像させる)・三男夫婦と三兄弟の父の弟 (chāchā) とが、それぞれ一つの居住単位をなし、二つの居住単位が一つの ghar を形成する (佐々木, 1984 : p. 19)。
- (9) 次世代では消滅する。殆んど仕事をしない一人が自分を単独生活の parivār と申告したため。この家系の三人は ghar・dukān 一つに対応する。
- (10) 19C 中は村木伐採による副収入と耕地拡大による農具修理量の増大、20C には甘蔗・小麦等の集約的栽培による農具修理量の増大と焼成レンガ家屋化による木工収入の増大があって、Khatti の

jāti 職業は継統的「好運」に恵まれ、例外的に就業率が高い。

- (11) 完成品を運ぶのに用いる畜力は原料土運搬に利用しない。
- (12) へり近くの穴に棒をいれてまわす。
- (13) 裏は乾いていないので、pinda に砂をつける。
- (14) 製品価格の70%は uplā の購入にあてられる。隣村に出す土器の燃料には隣村の Ghossī (イスラムの牛飼い jāti) の uplā を確保してある。
- (15) 不足分は他村・小都市への土器売却で補なう。
- (16) 重要な財産でもある馬は20~25頭を村民が所有するが、Jāt の持ち馬は村外に貸し出しているの
で、村にいたるのは Kumhār と Dhōbi の計4頭のみである。作物をたべる牛・水牛とは異なり、馬
には道端・水路堤の雑草を食べさせるので、耕地のない職業 jāti でも飼いやすい。近年普及した
barsim の畑に馬の堆肥を入れるのと引きかえに収穫の1/8を入手して半年分の飼料にあてる例も
ある。
- (17) 隣村だけで Dhādekī の2倍の土器を出荷するので、ニヶ村からの穀物収入は年間消費料の1.5
倍に達する。町の市場への土器売却代金を加えると、子弟を教育して、都市的雇用に従わせること
もできる。Kumhār の土器生産が近代に増大したと考えるのは、jāti 職業が近代化により低調に
なるとの通説とは矛盾する。金属容器の近代的普及が土器生産を急減させた (Opler, 1959 : p.
131) とみることもあるが、金属器の使用開始時期は通説で予想するのよりも早く、lōṭā-hukkā を
除けば、近代的变化は土器使用をとくに蚕食していない (佐々木, 1984 : p.17)。また土器類を常
用食器以外に用いるのは稀ではなく、とくに大型容器は現在でもほとんど全部が土器であって、使
用状況からは需要が急減したとは感じられなかった。むしろ、近代の緩慢ではあるが、確実な生活
水準の上昇により、とくに大型容器の需要が増大し、手近な Kumhār の供給量が増大したとみる
のが自然である。土器に限らず、前近代的需給構造のなかに近代的生産が突然出現する事態は想定
しにくく、需要全体が徐々に増大して近代的生産がなり立つ前段階が必ず存在し、北インド農村の
ある種の需要はこの前段階で jāti 職業に供給源を求めると考えられる。Kumhār が jāti 特有の
Durga puja をする (Freed & Freed, 1964 : p. 83) のも、この祭礼の北インド普及期と Kumhār
の経済的上昇期の一致 (19C後半以降) から、近代的現象とみるべきであり、非支配 caste の宗教
運動を Kumhār が指導する例 (Gumperz, 1958 : p. 680) も同断だろう。
- (18) Dhādekī では土器製造のみで十分な収入があるので運輸は重要ではない。
- (19) Anāj・店頭販売の実態は Dhādekī と大差がない。馬の飼葉を anāj で受けとることもある
(Freed, 1963 : p. 41, Lewis and Barnouw, 1956 : p. 71)。
- (20) 現在では重要な多い重量物である焼成レンガを運ぶことが多い。
- (21) 穀物移動の少なく、湿度の高くない冬期に土器を焼くのは、一種の time division である。
- (22) 基礎家族、同居者のいる二世代二夫婦家族、同居者のいる二世代三夫婦家族。
- (23) 被差別またはイスラムの Dhōbi もいるが、Dhādekī では非差別・非イスラムである。
- (24) Kultā-kulti などの通常衣類も Dhōbi が洗うことがある。しかし、小型の洗濯は各自が入浴時
(佐々木, 1984 : p. 16) に自分で洗う。とくに下着 (kacchā) は着衣のまま水浴して水を通し、必
要があれば洗って、干すのが普通である。Dhōbi がとくに汚れた衣類を洗うから、地域により被差
別になる、と考えるのは不正確であろう。
- (25) 夏期には発汗・砂嵐・雨から仕事量が若干ふえる。
- (26) 粘土とりを特に強調する (Sharma, H. P., 1971 : p. 173) のは洗濯用粘土採集と関連するから
だろう。繁忙を極めた rabi 収穫期後にも収穫物を運んだとみてよいだろう。Dhādekī では重要
ではないが、小都市間の馬車車夫が Dhōbi であることが多いので、Kumhār と同様に Dhōbi で
も運輸業は重要である。小都市での通勤洗濯業 (Sharma, K. N., 1961 : p. 153) も重要な副業で

ある。

- (27) 依頼する (Jāt の) 女性は出入りの Bhangī (被差別 caste) の女性に渡し、Bhangī の女性が Julhai の女性に手渡す。
- (28) Julhai の jāti 職業は北インドの他の農村でもほぼこの程度で (Eglar, 1960pp. 35, 179, Nath, V., 1965 : p. 745), jāti 職業だけで生活できたとは考えられない。織布の副業性は農村手工業の近代的没落の結果ではなく、農村手工業没落説にもとづいて手工業の再生をはかった Gandhi Asram 等の運動によって、Julhai の村内生産は現代になってむしろ増大しているのではないかと考える研究者もいる (Pradhān, 1966 : p. 38)。
- (29) 家系 A の 3 世帯、B の 2 世帯からなる。佐々木, 1984 : p. 18. の実測図の住居を含む。
- (30) 同居者の加わった基礎家族 I, 同居者の加わった二世帯二夫婦家族 1, 同居者の加わった一世帯二夫婦家族 1, 二世帯二夫婦家族から二世帯既婚男性の欠如したもの 1。
- (31) 他の住居群にみられるように、敷地があれば基礎家族単位で生活しようとする志向を認めるべきである。
- (32) 聴取によれば Julhai の家族数は 21 だが、住居登録家族数は 10, 1973~75 に確認できた ghar は 15 で、他の 6 世帯は村外に居住していた。
- (33) 設備を要する jāti 職業 (およびセットになった副業) を何等かの事情でつづけられなくなっても在村しつづけるとすれば農業労働者化以外に選択はない。Jāti 職業・副業の需要が大きくなれば、二人の兄弟が均等分割原則に従って経営を割ると、双方とも経営が行き詰って労働者化する危険が大きい。それまでの経営が行き詰っても、その jāti 職業・副業への需要自体は残るが、一度労働者化すると職業的設備を回復するのは困難だから、労働者化した職業 jāti の住民はそのままにして、外部から需要を満たすべく営業中の職業 jāti が入村する。古くから Dhadeki にいた Julhai の労働者化には、木綿工業の近代化による影響が大きいだろうが、類似の現象はいつでもおこりえた。設備型の職業 jāti ほどこの下降現象が明瞭になりやすいだろう。農業労働者化しても安定した雇用関係がないので、村外に流出しやすかったとみられる。流出先が農村部ならばやはり農業労働者化するしかなかったろう。この下降人口が農業労働者被差別 caste の人口の社会的供給源だったのかもしれない。
- (34) 一日おきの男性の整髪・ひげそり (男性 Nāi による), 女性の洗髪後の髪結い (女性 Nainī による)。
- (35) 現在では一人だけが顧客数の不安定な床屋を anāj 払いでやるのみで、他は学校の先生・事務員および農業労働者になっている。村内での床屋のサービスは、町でも営業している隣村の Nāi が半年に一世帯あたり 5kg の米 (または小麦または粗糖) を受けとって担当する。Jāt の言によれば、zamindārī abolition により、Nāi が riyāyā でなくなってから、Nāi 自らが従属的床屋業から転職し、村外の Nāi が入るようになり、その間には支払い側の Jāt 個人と Nāi の個別的関係の悪化もあったという。客観的には、独立後、支配 caste が町の床屋にいくようになって、Nāi の anāj のシェアが絶対的に縮小したのが原因だろう。
- (36) その世帯が jāti 職業に就業している場合に、その世帯の全収入にしめる jāti 職業による収入の比率が低かった。Jāti 内には、jāti 職業に就業しない世帯があるから、jāti の全世帯の全収入にしめる比率はもっと小さくなる。Gould, 1958 : p. 434 参照。
- (37) Kharif 耕作には役畜・大型農具が不必要だから耕作者たりうる。Rabi 耕作は資本がいるから困難だが、収穫に参加すれば十分な現物収入が入る。Nāi 人口が全体の 1/7 近い事例 (Chattopadhyay, 1970 : p. 222) では、「農民」以外の何物でもありえないだろう。Nāi には儀礼的機能が強く、支配 caste としては一世帯は必要だったが、その一世帯の床屋専業化も歴史的には困難で実際には農民・農業労働者だったと考えられる。

- (38) 基礎家族2, 同居者の加わった基礎家族1, 同居者の加わった二世代二夫婦家族1。
- (39) Ghēr は離村した Jinwar の ghar をかえたものである。
- (40) 結婚の仲人・伝達役、披露宴の料理等の手伝い (Mathur, 1968 : p. 261), 新生児とその母親の最初の外出のお伴 (Arya, 1966 : p. 112), 火葬場への同行など。
- (41) Sahay, 1961 : p. 181。Bhangī と同機能の報告例である。
- (42) Brahmin のいない Pakistan Punjab では Nāi が祭礼の料理を担当する (Eglar, 1960 : p. 40)。北インドの Hīndū 農村でも独立直後には Nāi を Brahmin より優遇した例がある (Lewis, 1956 : p. 71)。
- (43) たとえば18Cごろからとみてもよい。Kausik (1976) は Vanarasi の葬礼システム (Kausik, 1976 : p. 289) の記述で Nāi と Brahmin が相似的位置にあるとするが、別の記述 (*ibid* : p. 269) からは Nāi が参加していた葬礼に Brahmin が「割り込んだ」過程がうかがえる。Vanarasi の Brahmin は金融業から宗教活動へと進出したとみられ (Misra, 1975 : p. 97), 北インド農村でもこの進出と大きく隔たらない時期に、寄進・接待をうけるだけの受動的宗教人としての 'fakīr' 型 Brahmin から、多少の積極的機能をもつ Brahmin への変化がはじまり、Nāi の儀礼的機能を蚕食していったと考えるのが正確らしい。
- (44) 地域によっては被差別であるが、一般には差別されない (Freed, 1963 : p. 99)。
- (45) Dhādekī でつかうカゴの一部のみを Jinwar がつくる (佐々木, 1986 : p. 44)。
- (46) 水運び・食器の掃除は、Jāt の女性が purdah により外出しにくかったので Jinwar に任せていたが、Jāt の ghar の中庭にポンプをおいて、Jāt 女性が purdah を守りつつ作業できるようになってすたれた。
- (47) 近代の交通手段、とくに boggi の普及によりすたれた。1930年代以降の男性の主要収入源は、この jāti を優先的に雇用する粗糖加工の甘蔗搾りであり、小規模世帯ならば残り半年を失業して暮らしても生活可能な現金が入る。
- (48) Jinwar の男性が Jāt の女性と接触することはできないので、専ら Jinwar 女性が担当した。
- (49) 家系Aは4 ghar, Bは7 ghar, C・Dは各1世帯からなる (CはBの1世帯と同じ ghar に住むが1世帯とした)。Dは他の成員がすべて離村し(註39参照)、現在では老女一名のみである。Parivār・ghar とほぼ同様なので ghar のみを上げると、単身世帯2, 基礎家族6, 同居者の加わった基礎家族1, 二世代二夫婦家族1, 一世代二夫婦家族1, 同居者の加わった一世代二夫婦家族1, 二世代三夫婦家族1である。
- (50) Abadī 外の西に二世代三夫婦家族と単身世帯が住む。
- (51) 二世代二夫婦家族、一世代二夫婦 (parivār は2基礎家族) に同居者の加わったもの (家系Bと家系Cの同居)。
- (52) 一世代二夫婦, 同居者の加わった基礎家族, 単身世帯各1の他は基礎家族5。
- (53) 家系Aは1930年代に、家系Bは1900年代には各1世帯だった。甘蔗加工の盛行によって、地位が向上し (Pradhan, 1966 : p. 45), 雇用が安定した結果 (Mathur, 1968 : p. 260), 急速に世帯数が増えたとみられ、もともとはやや流動性の高い jāti だったとも考えられる。
- (54) 売却しようとしているとの噂があった。他にも私的囲い込みで大量の「共有財産」が消滅したが、強制的な制約は特になく、「村落共同体」の存在を疑わせしめる。
- (55) Chalan も特定の非農業的活動に対応するが, jāti とはよばない。Chalan の職業には都市的傾向が強く、北インド農村のムスリム一般と共通している (Chattopadhyay, 1970 : p. 226)。都市からの移住者で都市的職業を放棄した、どみなされることが多い。
- (56) 北インドの Telī の身分的位置は Chamār よりやや高い程度 (Ansari, 1959-60 : p. 68) と考えられている。

- (57) 油搾りは副業的だった。Telī の副業化は caste 分業の崩壊の結果とされるが、1900年前後の粗糖生産拡大開始期に油搾り用具を甘蔗搾りに転用し(佐々木, 1985: p.20), みかけの専業率が上がった(Cohn, 1960: p.247)あと, 甘蔗加工の専門化により Telī の専業率が下がったのを, 本来の油搾り業の興廃と誤認している可能性がある。
- (58) 基礎家族 5, 同居者の加わった基礎家族 1, 二世世代二夫婦家族 1。
- (59) 同居者の加わった両親のいない基礎家族, 基礎家族, 二世世代二夫婦家族, 一世代二夫婦家族, 二世世代三夫婦家族各 1。粗糖加工がこの chalan と関連しているとみなされ, 優先的に雇用される(佐々木, 1986: p.20)ので, 安定した収入がある。
- (60) 牛乳が不足すれば Jāt から購入するが, Jāt の特定世帯との関係はない。
- (61) 0.5kgの ghee, 0.5kgの sūji (ふすま), 1kgの粗糖をにて, 1日2kgの halowā (おかし)をつくる。粗利益は54%に達する。
- (62) 基礎家族, 同居者の加わった二世世代二夫婦家族, 同居者の加わった一世代三夫婦家族。
- (63) 定着 Jōgi は多様な職業につく(Sharwa, H. P., 1971: p.71)。
- (64) 家屋の焼成レンガ化等により職業率は高まっているが, 石工就業率は10%強である(Nath, V., 1965: p.745)。

参 考 文 献

- Alavi, H. 1972 "Kinship in West Punjab village" *Contributions to Indian Sociology* 6 pp. 1-27
- Ansari, G. 1959-1960 *Muslim Caste in Uttar Pradesh: A study of cultural contact* (*Eastern Anthropologist* 13(2))
- Arya, S. 1966 "The ritual folksongs of Meerut of the western Uttar Pradesh" *Folklore* (Calcutta) 7(3) pp.108-115
- Baden-Powell B. H. 1972 *The Indian Village Community* N. D. Cosmo
- Chattopadhyay, 1970 "Rites and rituals: media of rural integration" *Eastern Anthropologist* 22 pp. 217-233
- Cohn, B. 1960 "The pasts of an Indian village" *Comparative Studies in Society and History* 3(3) pp. 241-249
- Eglar, Z. 1960 *A Punjabi Village in Pakistan* Columbia Univ. Pr., N, Y,
- Freed, S. 1963 "Fictive kinship in a north Indian village" *Ethnology* 2 pp. 86-103
- Freed, R., and S. Freed 1964 "Calenders, ceremonies and festivals in a north Indian village" *Southwestern Journal of Anthropology* 20 pp. 67-90
- Gould, H. 1958 "The Hindu jajmani system: a case of economic particularism" *Southwestern Journal of Anthropology* 14(4) 428-437
- Gumperz, J. 1958 "Dialect differences and social stratification in a north Indian village" *American Anthropologist* 60 pp. 668-682
- Kausik, M. 1976 "The symbolic representation of death" *Contributions in Indian Sociology* 10(2) pp. 265-292
- Lewis, O. 1956 "Aspects of land tenure and economics in a north Indian village" *Economic Development and Cultural Change* 4 pp. 279-302
- Lewis, O., and V. Barnouw 1956 "Caste and the jajmani system in a north Indian village" *Scientific Monthly* 83(2) pp. 66-81

- Mathur, M. S. 1968 "Rural change in Perspective" *Economic and Political Weekly* III pp. 259-265
- Mishra, K. P. 1975 *Banaras in Trsition, 1738-1795: A Socioeconomic study* Munshiram Manoharlal, N. D.
- Nath, V. 1965 "The New village III" *Economic Weekly* 17 pp. 745-750
- Opler, M. 1959 "The chrological change and social organization in a village of north India" *Anthropological Quarterly* 32 pp. 127-133
- Pradhan, M. C. 1966 *Political System of Jat in Northern India* Oxf. Univ. pr., Bombay
- Reddy, N. S. 1955 "Functional relations of Loхар in a north Indian village" *Eastern Anthropologist* 8 pp. 129-140
- Sahay, K. N. 1967 "Caste and occupation in a village in Bihar" *Man in India* 47 pp. 178-188
- 佐々木 明 1981 「ダーデキー・サールハーブールの宗教生活(1)北インド農村の通過儀礼と宗教施設」『民族学研究』45(4)pp. 293-307
- 佐々木 明 1983 Dhādeki-Sālhāpūr の家庭生活と周辺小都市—北インド農村の社会と生活(Ⅲ)—」『(信州大学人文学部) 人文科学論集』17pp. 79-91
- 佐々木 明 1984 「Dhādeki-Sālhāpūr の物質文化——北インド農村の社会と生活(Ⅳ)——」『(信州大学人文学部) 人文科学論集』18 pp. 15-30
- 佐々木 明 1985 「Dhādeki-Sālhāpūr の農業(1)——北インド農村の社会と生活(Ⅴ)——」『(信州大学人文学部) 人文科学論集』19 pp. 11-27
- Sharma, H. P. 1971 "Caste and occupation mobility in a Delhi village" *Eastern Anthropologist* 23 pp. 159-179
- Sharma, K. N. 1961 "Modernization and rural stratification: an application of the micro level" *Economic and Political Weekly* 6 pp. 1537-1543

Occupational Castes in Dhādekī-Sālhāpūr

— A North Indian Village (VI) —

8 occupational castes live in Dhādekī. All the households of Khatti (carpenters:4 households), Kumhar (potters:3) and Dhobi (washers:2) receive *anāj* (cereals, or cereals as periodical and settled payment) in return to their caste services. A few households of Julhai (weavers:15) and Nai (barbers:1) obtain unstable *anaj* partly following their traditional activities. Jinwar (13), Gosain (1) and Mussalman (17) show at best the fragments of their respective caste works for additional income.

Caste service subsidiarity in Dhādekī life, as depicted in my former papers, is confirmed here by the observed minor or negligible share of traditional occupation income in their household budget which is largely supported by crop payment at the *rabi* harvest. This situation is summed up as a disguised underemployment system in which these castes, following their nominal occupations in agricultural slack time, form a reservoir from which the harvesting labour is to be extracted. Their extended family tends to appear when the homestead space is limited, and the general preference is for the elementary family. An occupational caste frequently consists or consisted of only one household now or several decades back. The minimality resulted in the lack of kinship organization and in the instability of the caste service succession.